

身に付けた力を生徒が実感する授業づくり ―「読むこと」の指導における 司書と連携した授業実践から―

長崎県佐世保市立相浦中学校
前田 和子

はじめに

長崎県教育委員会は、小中学校で身に付けなければならない国語の力をわかりやすく示した「国語力向上プラン」リーフレットを作成している。また、その中で、九年間の学びのつながりを踏まえた授業、授業の目標（ねらい）を明確にした授業等の授業づくりのポイントを八点あげて、全県的な国語力向上に取り組んでいる。

これを受けて、私も「生徒に本時の学習目標（身に付けたい力）を明確に意識させ、教師が手だてを工夫すれば、生徒は自ら学び、その成果を実感し、確かな国語力が定着する」という視点を持って、授業改善に取り組んでいる。

様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けること

〈学習指導要領 読むこと 力〉

今回は、この力を付けることを目標とした実践について報告する。

実践例

「ブックトークをしよう」（全体計画）

- ①ブックトークを知る。
- ②ブックトークの作り方を知る。
テーマ設定（くだけどく）
- ③選書をする。（三分野以上五冊）
- ④話のつながりを考えて構成をする。
- ⑤シナリオ原稿を書く。
- ⑥発表練習
- ⑦発表

〈全十時間〉

1 単元導入の工夫

本単元の目標を達成するには、「①様々な文章にふれること」「②必要な情報を得るための選書を行うこと」が本単元の「読むこと」の学習成果を大きく左右すると考えて、次の

ような二つの工夫を行った。

まず、ブックトークのテーマを「くだけどく」（例：寒いけれどあったかい）というやや漠然とした指示にすることによって生徒が自ら課題を設定し、課題を解決する学習活動を仕組むことで、国語力の定着を意図した。

次に、三〜四人の小グループでNDC分類で三分野以上の五冊を選書するという課題を与えた。それぞれが選んだ図書を比較検討し、必要な情報を集める楽しさの中に学び合いをさせることを意図した。

生徒が設定したテーマと選書の例

テーマ 不可能のようだけれど可能
選書

- ①エジソン（289）
- ②ユビキタス（500）
- ③とべバツタ（913）
- ④幸せのちから（936）
- ⑤ギネス2007（033）

（ ）内はNDC分類番号

2 学校司書との連携

本単元では、学校司書と連携した授業を試みた。司書の役割を次のようにした。

〈単元の導入〉ブックトークの示範、選書のポイントや効果的な本の探し方の説明
〈単元の展開〉必要な情報を集めるための選書や読み方の指導

〈単元のまとめ〉相手意識を持った話のつながりや表現についての指導と評価

学校司書の持つ「ブックトーク」に関する専門的知識、技能そのものを学習材として活用するという試みである。司書の存在が豊かな学びを支えた。

3 自己評価による身に付いた力の確認

生徒は、自らが付いたと感じた時に達成感を味わい、学習意欲を高めさらに力を付けた。

本単元第三時の自己評価から

*自分にどんな力が身に付いたか。

- ・いろいろな本を読む力
- ・テーマに沿って本を選ぶ力
- ・つながりやを考えて構成すること
- ・自分の考えで、テーマに沿って話をつなげたこと。それをみんなに上手に伝えられたこと

生徒は自らの学びの成果を確実に味わった。

4 単元展開の工夫

選書をした次の時間、生徒たちはただひたすらに本を読んだ。今までふれようとしなかった分野の図書を手に取り、互いに内容を教え合った。

学習が進むにつれ、生徒が実感したのが、うまく話し合いをしないと学習が進まないことである。進んで話し合うようになった。

自分が選んできた本をなかなか譲らない場面もあった。

- ・テーマに沿った選書のために必要とする図書の分野について話し合う
- ・五冊に絞り込むために話し合う
- ・話のつながりやを考えた構成をするために話し合う
- ・前後のつながりやそれぞれの工夫の仕方について話し合う

話のつながりやが理解できていないと、紹介文が作れない。題名読みで選んだ本がつながらないと言っては図書館に足を運ぶ。アドバイスを司書や教師に求めてくる。課題解決を図る中に確かな学びが見えてきた。

5 生徒の変容

情報を集めるためにひたすらに本を読み、

必要な情報を要約する。その要約を班員にわかりやすく伝える。文の組み立ての効果を考えて原稿を作成する。相手意識を持って効果的に話す。生徒たちは、常に課題意識を持って取り組んだ。目標（身に付けたい力）を明確にし、自ら学び、その成果を使い生かす場を設けることによって、生徒は既存の国語力を駆使しさらに力を付けていく。確かな学びがそこに生まれた。

まとめ

国語の授業は様々な形で成立する。しかし、どのような力が付いたかの検証や生徒自らがその力を実感する場の設定が不足しているように思う。

理解し、考え、感じ、想像し、表現する。これらの生きて働く国語の力が身に付いたと生徒が実感できた時、確かな国語力が定着する。そして、それは、私たち国語教師が生徒の実態に応じた工夫を重ねることによってなされるのである。今後も、確かな国語力の定着を目指した工夫と実践を重ねていきたい。

まえだ かずこ コミュニケーションの基盤となる言語活動の実践に取り組んでいる。「ことばの学びを拓く」(苦の会)にて実践執筆。